

骨の音

二宮桂子作品集

骨の音



二宮桂子作品集

著 者 略 歴

二 宮 桂 子 (にのみやけいこ)

大阪府生れ

大阪府立大手前高女卒

大阪府立女専国文科卒

元「文芸首都」「反俗」に所属し

「関西文学」編集委員を経て

現在「関西文学」同人

現住所 大阪市大淀区大淀中 1 丁目 4-14 菅本方

骨 の 音

昭和54年 2 月 6 日発行

定価980円

著 者 二 宮 桂 子

発 行 者 横 井 晃

発 行 所 関 西 書 院

大阪市生野区林寺 2 丁目20-1

編集担当 竹 島 昌 威 知 / 印刷製本 第 一 印 刷 出 版

0093-190063-0980 © Keiko Ninomiya 1979

目

次

暗

62

炎

127

彷徨

徨

93

診

断

61

骨

の

音

7

ホ
テ
ル
.....
181

白
砂
の
道
.....
213

三
角
の
あ
ご
と
そ
ろ
ば
ん
玉
.....
249

ね
だ
る
.....
285

骨
の
音

毎夜典子は、夫の骨を枕上まくらがみにおく。

金欄の小箱の中でそれは、かさ、こそ、と幽かな音を立てる。

耳にあてがいじっときく。

少し振ってみる。更に烈しくふる。

骨達の左右にかしぎ、ぶつかり合い倒れ合う音が伝わってくる。

のど仏や頭蓋の碎片や小指の骨などのあわてふためく気配がしばらく続き、やがて少し鎮まってくる、典子はそれらをそっと枕上におく。

不安定に揺れている感じが、やがてびたっと位置をきめる。典子はほっとしたように、瞳でそれをいとおしむように包む。

ややあって、今度はまさぐるように傍らの空間に瞳をさまよわせはじめ。

夫の骨壺の金欄の残照のにじんだあたりの闇に、幻の骨つぼがうかび上る。

それは夫の骨壺よりは一まわりも小さい、華奢な骨達の入っている、悲しいまでに軽いS君の骨壺なのである。

S君の骨つぼは夫の金欄の傍らで、はにかんだように、少し窮屈そうに遠慮がちに鎮まっている。丁度生前のS君そのままに。

S君の骨は誰の目にも見えない。

しかし典子の瞳の底では、それははっきりとした映像を結び、流れのような白い飛沫をあげ、清冽な音を立てている。

純粹な甘美な青年特有の響。理^{ことわり}なくして逝った者の立てる骨の調べ。

典子は幻のS君の骨壺に、京都でみかけた京人形の水色の帯地をかぶせている。

夫の骨壺の金欄の傍らで、それはいかにも淡く悲しく、闇にすいこまれてしまうようなはない風情を漂わせている。

四十路の男ざかりの夫の骨に較べ、二十四の初冬に逝ったS君の骨はいかにも頼りなく、のど仏も、まだ充分には成長していなかっただろう。

S君は、電話のコードで縊れて死んだ。

彼は大学院生にしては不似合な豪華なマンションの一室で、ベッドから逆さにずり落ちるようになって切れていた。

その白々した青年特有のひ弱なのだ首には、どす黒いコードが二巻き、えなのようにまきついていた。

典子はS君の葬式にもいけず、彼のお骨を拾ったわけではないが、がらんとしたコンクリートづくめの殺風景な台の上で、強烈な熱にやかれ綿毛のように軽くなった華奢な骨達の間で、S君ののど仏は、あの莊嚴な仏様の姿をとらず、もろもろに裂けていただろう。

白くすすきり乾いてあがらず、湿って灰色に、もしくは黒ずんだ模様をにじませていただろう。

しかし毎夜典子が夫の骨と共に枕上に並べるS君ののど仏は、少しも損われず、可憐な仏様の姿で鎮座しているのだった。

それはひっそりとあるかなきかの風情を漂わせ、ひそやかな水浴のような清冽な甘美な音を立てているのだった。

理学部の院生である彼を、典子はS君と呼んでいた。

S君は地方都市にすむ富裕な夫の知人の一人息子で、この春地方都市の大学院から京都のドクターコースにすすんだのだった。

典子は彼の両親の懇望をうけ、保護者のような立場になった。時々家へ食事に招いたり、彼のマンションを訪れ、花を飾ったり、クッションを作ったりした。

こもって勉強ばかりしている彼を、画展に誘ったり仏像めぐりにつれ出したりした。

典子は一まわり年下のこのS君が、何か今の世には稀有の存在のように思えるのだった。彼は夜遅くまで研究室に居残ったり、終日マンションにこもって、 f だの Ω だの Σ 等の数式にとりくんでいた。

典子にはS君が、自分の世界からは遠く離れたはるかな天体で、露を含んで棲息している生き物のようなあえかさを感じた。

それはもどかしさに通じた。

まだ充分男としての色調をもたず少年の初々しさともろさをもつ彼に、破損したい気をそそられた。

淡泊な潔よさに、殆ど苛立つものを覚えた。残忍さを誘われた。

典子はS君をことさら坊やと呼んだ。

彼のマンションにいかなかった。かかってくる電話には、わざと邪慥に扱った。

ひと月目にさすがに気になり出した典子が彼のマンションを訪れた時、S君は痛々しいまでにやつれていた。

目がおちこみ、眼窩の奥で瞳だけをきらきらさせていた。無精髭をはやし、急に大人びて感じられた。何だか男くさく、典子はあわててカーテンを引き窓をあげ放った。

S君はひと月ぶりに会う典子をまばたきもせず見詰めていたが、突然両眼から涙をふき上らせた。

典子にかけよると倒れるように胸に顔をうづめ、幼児のようにしゃくりあげた。そのままずり落ちるようにひざまづき、典子の両足を抱き更に烈しく泣いた。

典子はおろおろし彼を立たせようとするのだが、S君は頑強に拒み、両脚に尚も顔をすりつけるのだった。

典子は静かに自分も跪いた。じっと彼をみつめ、指先で彼の瞳をしずかになぞった。

水滴を含んで厚っぽくなった彼の脛から、ほとばしるように涙が散り、斜めにくろがり、産毛ののこった彼の頬にくっついた。

それはこよなく美しくきららに光り、そこに小さな典子が首をかしげて映っていた。

典子は思わずS君の頬を両手ではさむと、唇をよせ、頬できららに光るその水滴をしずかに吸った。

小さなしずくは、典子の口の中をころがり、甘美な味がひろがった。典子は思わず目まいがした。

あの日どうしてあんな風になってしまったのか。

それは、S君の頬にきららに光っていた水滴のせいだったのだろうか。はじめて見たS君の無精髭、或は典子とその日持参したガーベラの血の色のせいだったのだろうか。

それは典子が誘ったのか。S君がさそったのか。

典子はS君の唇を、そのおずおずとした舌先が、やがて赫熱の強靱なものに変化するのを味わっていた。

そのせつかちさときこちなさを、典子は愛らしい、と思った。むき出しの情欲を、その奔流を美しい、と感じた。年下の男が、これ程可愛いとはしらなかった。

坊やでなくなった坊やのS君に、典子は殆んど安堵した。

S君の電話は頻繁になった。三日にあげず会いたがり朝昼夜の見境いがなくなった。

典子はもう決して、S君を家へは招かなかった。

典子には自宅を聖域として保ち、外部での事は外部で片づけるといった風があった。そっと帰ってきてすましているのが好みだった。自分の域を犯すものは断固排除した。

五つき近く典子はS君にのめりこみ、共に陶酔し、保護者としての立場を全く放擲していた。その日典子は一泊どまりで倉敷へ来た。

すき透った晩秋の風が、コート裾をひるがえした。

かつてこの地を訪れた早春の頃、堀割の柳はしなやかに軽々と舞っていた。今枝葉をまし重
つ苦しくなった柳は、堀割の水におおいかぶさるように垂れていた。

堀割の水が白く光った。

S君の子を葬るのに、もっともふさわしい地に思えた。

かつて倉敷に遊んだ日、貼り瓦のずり落ちた裏通りに産婦人科のあったのを、典子は思い出
したのであった。

坊やの坊やが胎内にいる。典子は思わず苦笑した。S君の胎児を坊やにきめていた。

縁うすい小さな小さな彼への、せめてものはなむけに、典子はママのすきな倉敷の風物を見
せてやりたかった。

美術館で、モネやゴッガンやユトリロを見せた。

「この世には美しいものが一杯あるのにね」

郷土玩具館に入り犬張子を見た。巴風を見せ獅子頭を見せた。

「坊や、本当にごめんなさいね」

幾度もつぶやいた。

典子のカルテには、住所も氏名もいつわってかかれた。もし不測の事があり坊やと共にこの
倉屋敷のある町で終っても、詮ない事に思われた。

この事を、典子は勿論S君にはつげなかった。世事にうとい彼が、生んでほしい、などい
うものなら時機を逸するというものだった。夫にはもとより言える筋合いではない。

麻醉に弱い典子は、時間がきてもめざめなかった。

医師はさぞや典子のいつわりの住所地の電話番号を探すのに、困り果てた事だろう。

それでも典子は戻ってきた。寝台の上でのたうち廻りわめきながらもと角目覚めた。

もしあの日典子がもどらなかったら、今彼女は、夫の骨とS君の骨を枕上に並べるような事はなかっただろう。

麻醉の消え去らない重苦しい体を、典子は倉敷の裏通りのさびれた宿で横たえていた。S君との事はこれで終った、と思った。彼は前途のある青年だった。

その年の冬は典子にとって、冷めたくきびしい冬になった。

典子は体調がすぐれず、それに不眠さえ重なった。体も心も無性にだるく、うつうつと暮した。典子の心の茫漠としたところで、三つきの坊やは一にぎりの血のかたまりとなって、倉敷の堀割の水にうかんでいた。

典子はふた月余り、S君のマンションに行かなかった。その間幾度も彼から電話がかかった。ものうくのろろと受話器をとる典子の耳に、S君の声は苛立たしく、怨じるように響くのだった。

S君は典子と結婚したい、という。典子は心もち照れたような微妙な面持で、それをきく。典子が二十四才のS君のお嫁になる。夫と別れ中学生の娘をつれて……むしろ娘の方が彼に似つかわしく思われた。

S君が四十四才の男盛りになった時、典子はどのような老醜をさらすのだろう。

せっかちな彼はそうした不自然さも、典子のもろもろの立場も無視して、ひたすら結婚をい募るのだった。S君は自分の未来へ、可憐な少女の典子を登場させているかのようだった。

S君が死ぬ前夜、正確にはその日の零時すぎ、典子は確かに彼の電話をうけとった。

電話は居間の机の上でなりひびいた。

「今頃、誰だろう」

めざとく聞きつけた夫はつぶやいた。

典子はわざとゆっくり居間に向った。

昼間典子はS君の執拗な電話に、ほとんど自制を失っていた。彼は三十分おき位に電話してき、典子に会いたい、といい募った。

「今日どうしても会いたい。これからそちらへ行く」という。

「来るのなら、私外出します」

典子は冷めたように放った。

「だったら今すぐ来てほしい」

彼の声は切迫していた。

そこには病的なかげがやどっていた。強制的な粘りを感じた。

S君が典子が人妻であり中学生の娘の母親であるという現実を無視するのはいいとしても、典子の体調まで考慮に入れないのは許せなかった。もとより彼は知るよしもないのだが、だから一層彼女は腹立たしいのだった。その日は又一段と調子がわるく、苛立っていたのだった。